

<編集後記>

ここに学会紀要の第2号をお届けすることができました。編集委員会を代表して、お礼申し上げます。アメリカの大学では“Sophomore Slump”への対応が大きな課題になっています。スポーツの世界でも「2年目のジンクス」などといわれ、ルーキーで大活躍した選手が、2年目にはなぜか不振に陥ることが多々見られます。大学では、1年生は、学生自身も不安を抱えながらも、新しい環境で張り切って大学生活を送っています。また、大学も様々な初年次教育プログラムを通じて、手厚いケアを提供します。しかし、大学は1年目を乗り切り、長い夏休みのあと、再びキャンパスに戻ってきた2年生には、つつい学生への目配りが欠けてしまいます。ところが、2年次は、学生にとって初年次に劣らず困難な時期です。2年生になって受講する科目の内容は次第に高度なものになります。また、そろそろ卒業後の進路を考え、それに応じて専攻を決める準備をしなければなりません。また、キャンパスでの生活になじみ、家族の絆より大学での友人や恋人との関係を重視し始め、次第に家族から心理的にも経済的にも自立しなくては、と悩み始めます。そこで、自分の能力や将来に悩み、勉学にも身が入らず、成績も低下したり、精神的に不安になることが多くなります。

本紀要も今回から会員の皆様の投稿原稿を中心に編集することになり、2年目でもあることから、“Sophomore Slump”を心配し、果たして原稿が集まるかどうか、編集委員一同、大学2年生のように不安な気持ちで編集作業に取り掛かりました。が、その心配は嬉しいことに杞憂に終わりました。研究論文、事例研究論文合わせて18本もの投稿があり、査読者の手配に嬉しい悲鳴を上げるほどでした。いずれの論文も力作ばかりでしたが、査読者による厳正な審査の結果、研究論文2本、事例研究論文4本を採択し、本誌に掲載することになりました。今回採択に及ばなかった論文も、ぜひ査読者のコメントを参考にされて、次号への投稿をお願いいたします。

紀要が卒業年度を迎える第4号までお付き合いしたいところですが、学会の規約により今期の編集委員会は、本号の発行をもってその任期を終わります。来年からは藤田哲也会員を編集委員会委員長として新しい体制で出発いたします。これまで以上の活発な投稿をお願いいたします。

最後になりましたが、投稿された会員の皆様、査読していただいた会員の皆様、そして編集委員会の同僚に心より感謝いたします。

編集委員会を代表して 川嶋太津夫